

まちづくりシンポジウム

「花と緑がつなぐ これからのまちづくり」

～花がつなぐ 人・地域・未来～

|開|催|報|告|

皆さんは、まちの中の花や緑を、まちを彩るための単なる装飾として捉えてはいないでしょうか。しかし花や緑は、人と人をつなぎ、地域の持続性を支えるなど、景観の向上にとどまらず、住民の心身の健康や地域コミュニティの形成など、多面的な効果をもたらす存在であり、いわば社会的インフラとして地域を支える力を持っています。

本シンポジウムは、花と緑を活かしたまちづくりの考え方や実践事例を共有し、今後の花のあるまちづくり活動を広げていくための視点を、参加者の皆さまとともに考える場として開催しましたので、概要をご紹介します。

開 催 概 要

- 開催日時 / 令和8年2月11日（水） 午後1時30分～午後4時30分
- 会 場 / 柏市民文化会館 小ホール（柏市柏下107番地）
- 開催方法 / 現地会場・オンライン
- 対 象 者 / 県、市町村、NPO関係者、企業、ボランティア関係者、学生など
- 後 援 / 柏市

第1部 基調講演

- 基調講演① 千葉大学 グランドフェロー・社会構想大学院大学 教授 池邊 このみ 氏
- 基調講演② 北海道恵庭市経済部花と緑・観光課 課長 大林 恒 氏
- 基調講演③ NPO 法人 Green Works 木村 智子 氏

第2部 パネルディスカッション

テーマ：これからの「花のあるまちづくり」の進め方

- 【パネリスト】 千葉大学 グランドフェロー・社会構想大学院大学 教授 池邊 このみ 氏
北海道恵庭市経済部花と緑・観光課 課長 大林 恒 氏
NPO 法人 Green Works 木村 智子 氏

【コーディネーター】

一般財団法人千葉県まちづくり公社 小川 剛志 氏
専務理事・まちづくり情報センター長

公園を花卉産業のポップアップ地に ～千葉の花で千葉の公園を変身させよう～

池邊氏は、花や緑を単なる景観要素としてではなく、人と人の関係性を育み、地域の持続性を支える基盤として捉え直す必要性を示しました。

花や緑のある空間が人の行動や意識を変え、その積み重ねが地域やまち全体の変化につながっていくと述べ、花と緑をまちづくりの視点から考える重要性を強調しました。



【コミュニティガーデンが生み出す意義と効果】

講演では、横浜市や東京都江東区の事例を交えながら、コミュニティガーデンの意義と効果について説明がありました。

花壇づくりや緑の手入れを通じて人が集まり、世代や立場を超えた交流が生まれることで、地域への愛着や見守りの意識が育まれます。花や緑は、そこに関わる人の行動や関係性を変え、結果として地域の安心感や活力を高める役割を果たしていることが示されました。

【公園の課題と、これから求められるグリーンインフラ】

さらに、公園をはじめとする公共空間のあり方についても問題提起を行いました。

昭和期に整備された公園は、子どもの遊び場や緑地の確保を主な目的として整備されてきましたが、気候変動や人口構造の変化などを背景に、現在は地域の課題解決や人のつながりを生み出す場として、より多機能な役割が求められていると指摘しました。

花や緑を活かした空間は、単なる緑化ではなく、防災、健康、交流といった多様な価値を持つグリーンインフラとして位置づけ、積極的に活用していく視点が重要であると述べました。

【社会的インフラとしての花と緑】

こうした観点から、花と緑は景観の向上にとどまらず、住民の心身の健康や安心感の醸成、地域

コミュニティの形成など、多面的な効果をもたらす存在であり、地域の暮らしやつながりを支える基盤として捉えることができると強調しました。

一方で、花のあるまちづくりを継続していくためには、行政だけでも、市民の善意だけでも成り立たず、それぞれの立場が役割を分担しながら連携して取り組むことが重要であると述べました。行政は制度や環境整備を担い、市民や地域団体は主体的な活動を担い、専門家は知見の提供や調整役を果たすことで、持続的な活動につながると説明しました。

また、千葉県は気候や立地条件に恵まれ、多様な花や緑の資源を有する地域であり、花のあるまちづくりを展開する土壌があることにも触れ、こうした地域特性を活かすことで、花と緑を通じたまちづくりをより広く、継続的に進めていく可能性があることを示されました。

講演の締めくくりとして池邊氏は、「公園が変わると人が変わる。人が変わると、まちが変わる」と述べ、花や緑を活かした空間づくりが人の行動や意識を変え、その積み重ねが地域やまち全体の変化につながっていくことを強調しました。

池邊氏の講演は、本シンポジウム全体の方向性を示す理論的な柱として、後に紹介された自治体の実践事例や市民活動、パネルディスカッションでの議論へとつながる重要な視点を提示するものとなりました。

花で育む市民協働のまちづくり ～恵庭市 60 年の実績と次世代への継承～

大林氏は、花を植えること自体を目的とするのではなく、花と緑を通じて人が関わり、学び、つながっていくプロセスこそが、まちづくりにおいて重要であるという視点を示しました。

恵庭市では、市民の主体的な関与を大切にしながら、花のまちづくりを継続的な活動として積み重ねてきたことが紹介されました。



【市民の発意から始まった花のまちづくり】 ～恵庭市における 60 年の歩み～

恵庭市の花のまちづくりは、昭和 30 年代、市民の自主的な取り組みから始まりました。

当初は、「花を植えて本当にまちが良くなるのか」といった懐疑的な声もありましたが、市民の熱意から始まった活動は徐々に広がり、現在では市民協働のまちづくりとして地域に定着しています。

花を育てる活動は、市民一人ひとりがまちに関わるきっかけとなり、地域への愛着や誇りを育てる取り組みへと発展してきました。

【市民・行政・企業が支え合う仕組みづくり】 ～共通のビジョンと役割分担～

花のまちづくりが継続してきた背景には、市民・行政・企業が共通のビジョンを持ち、それぞれの役割を担ってきたことにあります。

恵庭市では「花のまちづくりプラン」を策定し、方向性を共有するとともに、推進体制を整備してきました。行政は制度や環境整備を担い、市民は主体的に活動に関わることで、無理のない持続的な取り組みが実現していると説明しました。

【花のまちづくりが「地域の資産」へ】 ～拠点施設「はなふる」の整備～

こうした市民活動の積み重ねは、花のまちづくりを支える拠点整備へとつながりました。その象徴が、花の拠点「はなふる」です。

「はなふる」は、花や緑を通じた交流や学びの場として整備され、市民活動やイベントの拠点と

しての役割を担っています。整備にあたっては、Park-PFI を活用し、民間の力も取り入れながら事業が進められました。

これにより、これまで地域の各所で展開されてきた活動が集約され、発信力が高まり、花のまちづくりは「活動」から「地域の資産」へと発展したと説明しました。

【次の世代へつなぐために大切にしてきたこと】 ～市民主体と行政の後方支援～

恵庭市では、花のまちづくりを次の世代へと継承していくことを重要な課題として捉えています。

講演では、その方向性の一つとして「相談・学び・交流」の機能を備えた「(仮称) 花と緑の文化センター構想」にも触れられました。

これは、これまでの恵庭市における花のまちづくりの集大成として、開催された「全国都市緑化北海道フェア」を一過性のイベントに終わらせることなく、次世代への継承のきっかけと捉え、人を育て、活動を支え、文化として地域に根付かせていくための拠点づくりを目指すものであり、今後も市民の主体性を大切にしながら、行政が後方から支え、共に考え、共に育てていく姿勢が不可欠であると強調しました。

恵庭市の取り組みは、花と緑を通じて人が育ち、その積み重ねがまちを育てていくプロセスを示す実践例として、参加者に多くの気づきと学びを与える内容となりました。

花のあるまちづくりの進化 ～気候変動時代に求められるガーデンと市民の力～

木村氏は、花のあるまちづくりを一過性の取り組みで終わらせず、地域に根付いた活動として続けていくためには、人と人、人と地域との関係性を丁寧に育てていく視点が欠かせないと述べました。

花や緑をきっかけに生まれるつながりが、人の行動や意識を変え、まちづくりを支える力になることを示しました。



【時代の変化とガーデンの役割】

近年は、気候変動や生物多様性の低下といった課題が顕在化する中で、花や緑のあり方も変化しており、ガーデンは景観づくりにとどまらず、環境への配慮や持続可能な暮らし方と結びついた存在へと進化していると、木村氏は指摘しました。

また、こうした視点は、これからのまちづくりにおいて、花や緑をどのように位置づけるかを考えるうえで重要な考え方であると示されました。

【花や緑が生み出す「人の変化」】

花壇づくりやガーデン活動に参加することで、人の行動や意識が変わっていく様子が、具体的な事例とともに紹介されました。

花や緑がある場では、自然と会話が生まれ、世代や立場の違いを超えた交流が生じやすくなること、また「関わってみよう」という意識が芽生えることで、地域との距離が縮まり、日常の中での関係性が生まれていくことが示されました。

花や緑を介して生まれる人の関係性・つながりこそが、まちづくりにおいて重要な価値であると強調しました。

【楽しさを軸にした参加の広がり】

花のあるまちづくりを広げていくためには、「頑張らなければならない活動」にしないことが重要であると述べました。

作業の負担を軽減する工夫や、関わり方に幅を持たせることで、誰もが自分のペースで参加できる環境を整えることが、活動を継続するためのポ

イントであると説明しました。

GreenWorks の取り組みでは、花壇づくりをきっかけに、イベントや交流の場が生まれ、活動に直接関わらない人も含めて地域全体に関心や共感が広がっていく様子が見られると紹介されました。

【中間支援としての役割】

市民活動と行政の間に立つ中間支援の重要性についても言及しました。市民の思いやアイデアを汲み取りながら、行政制度や公共空間のルールと調整し、双方が無理なく関われる形を整えることが必要であり、助言や調整、対話の場を通じて、市民活動が孤立せず継続できる環境を支えることが、中間支援の重要な役割であると説明しました。

【花のあるまちづくりを文化へ】

最後に木村氏は、花のあるまちづくりは単に花を植えることを目的とするのではなく、人と人、人と地域の関係性を育てていくプロセスであると述べました。

楽しさを起点に関わる人が広がることで、活動は自然に定着し、やがて地域の文化として根付いていきます。そのためには、行政・市民・専門家がそれぞれの立場で役割を果たし、支え合う仕組みづくりが不可欠であると締めくくりました。

GreenWorks の実践は、花と緑を通じて人を育て、活動をつなぎ、まちづくりを支えていく中間支援の重要性を具体的に示す内容となりました。

パネルディスカッション

【パネリスト】

千葉大学 グランドフェロー・社会構想大学院大学 教授

池邊 このみ 氏

北海道恵庭市経済部花と緑・観光課 課長

大林 恒 氏

NPO 法人 Green Works

木村 智子 氏

【コーディネーター】

一般財団法人千葉県まちづくり公社 専務理事（まちづくり情報センター長）

小川 剛志 氏



テーマ：これからの「花のはるまちづくり」を考える

第2部のパネルディスカッションでは、コーディネーターから4つの問いが投げかけられ、基調講演を行った3名の講師が、それぞれの立場から意見を述べました。

Q1：暮らしの中の花の効果と、「花のあるまちづくり」の意義について

花のあるまちづくりの意義について、花や緑が人と人・人と地域との関係性を育む存在であるという視点から、それぞれの立場で意見が示されました。

【池邊氏】

花や緑があることで人の行動やコミュニケーションが変化することが、調査や実体験を通じて紹介されました。

花のある場所では会話が生まれやすく、人と人との心理的な距離が縮まること、こうした日常の積み重ねが地域のつながりや安心感につながっていくと説明されました。

【大林氏】

花のまちづくりが市民の誇りや愛着を育ててきたことに加え、にぎわいや経済効果、世代を超えた交流の場づくりにも寄与していることが示されました。

花は「きれいにするためのもの」ではなく、地域を元気にする力を持つ存在であると整理されました。

【木村氏】

花は人に幸福感や癒しをもたらし、自然と人を引き寄せる力を持っている点を強調しました。

花や緑は関係性を生み出す媒介であり、分断や孤立が課題となる現代社会において重要な役割を果たすと述べました。

Q2：これからのガーデニングの方向性について

今後のガーデニングの方向性については、気候変動や資材費の高騰、高齢化といった現実的な課題を踏まえた議論が行われました。

【木村氏】

多年草を中心としたナチュラルスティックガーデンの考え方が紹介され、ローメンテナンス・ローコストでありながら、生物多様性を高め、四季の変化を楽しめる点が強調されました。

花壇や公園が「点」ではなく、まち全体をつなぐ「緑の回廊」として機能する可能性も示されました。

【大林氏】

公共空間を「管理する場」から「市民とともに使いこなす場」へ転換していくことの重要性が語られました。

公園や花壇を柔軟に活用することで、市民活動や交流が生まれ、新たな価値が創出されると説明されました。

【池邊氏】

グリーンインフラの視点から、植物だけでなく人の健康や快適性も含めた空間づくりの必要性に言及し、今後は水や土の管理も含めた総合的な視点が欠かせないと指摘しました。

Q3：これからの「花のあるまちづくり」を誰が担うのか。

担い手については、「市民が主役である」という点で3者の意見は一致しました。

【大林氏】

市民・行政・企業・学校・中間支援組織の5者が、それぞれの役割を担いながら協働していくモデルが示されました。

行政は主導するのではなく、市民の活動に伴走し、障壁を取り除く役割を果たすことが重要であると述べました。

【木村氏】

市民活動と行政の間に立つ中間支援の重要性を強調しました。

調整や助言、対話の場づくりを通じて、市民が安心して関われる環境を整えることが、活動の継続につながると説明しました。

【池邊氏】

企業の社会貢献活動や学校、地域団体など、多様な主体が関わることで、花のあるまちづくりがより広がり持つことへの期待が示されました。

Q4：若い人たちにガーデニングの魅力をどう伝えるか。

若い世代へのアプローチについては、「押し付けないこと」「入口を広くすること」が共通のキーワードとして挙げられました。

【木村氏】

環境問題への関心が高い若い世代に対して、「花を植えましょう」という呼びかけではなく、「環境を一緒に守り育てる」という視点で関わりを促すことの有効性を紹介しました。

また、短時間・単発でも参加できる仕掛けや、楽しさが伝わる場づくりの重要性が語られました。

【大林氏】

体験型の取り組みやSNSを活用した情報発信など、関心を持つきっかけづくりの工夫が紹介されました。

義務ではなく「やってみたい」と思える仕組みが、次世代の担い手育成につながると述べられました。

【池邊氏】

子どもの頃から土や花に触れる体験を積み重ねることが、将来の関わりにつながる可能性を指摘し、教育との連携の重要性に言及しました。

パネルディスカッション後には、会場より実際に花のあるまちづくりに取り組んでいる県民や活動団体から、率直な声が寄せられました。

I. 高齢化・担い手不足への不安

長年、花壇づくりに取り組んできた市民団体の方から、「メンバーの高齢化が進み、活動の継続が難しくなっている」「若い世代にどう引き継いでいけばよいのか分からない」といった切実な悩みに対し、木村氏は「無理に若い担い手を確保しようとしなくてもよい」という視点を示しました。

今の活動が将来そのままの形で続かなくても、子どもや若い世代に花や土に触れる体験を残すことで、数十年後に別の形で関わりが生まれる可能性があります。また、「一度参加したら抜けられないのでは？」という不安を与えない呼びかけ方が重要であり、単発参加や短時間参加など、関わり方の幅を広げる工夫が必要であると助言しました。

II. 子どもや若い世代をどう巻き込むか

「子どもを巻き込むことで、活動の継続につながるのではないか」という声も挙がりました。

これに対しては、体験を通じて自然に関心を持ってもらうことの重要性が共有されました。

例えば、種団子づくりや花壇への植え付け体験や水やりなどの簡単な作業を通じて、子ども自身が「自分が関わった場所」と感じられる工夫として、自分が植栽した植物のところに名前を書いた札を立てる、ペットボトルで水やりをお願いするなどの小さな仕掛けが、継続的な関心につながった事例も共有されました。

III. 公共空間を「使いこなす」視点

公園や公共空間の活用については、「管理が厳しく、自由に使えない」「維持が大変になっている」といった課題が話題となりました。

恵庭市からは、公園を「禁止事項の多い場所」としてではなく、市民と一緒に使いこなしていく場として捉える考え方が示されました。イベントや交流の場として公園を柔軟に活用することで、人が集まり、結果として公園への愛着や見守りの意識が高まるという実践が紹介されました。

IV. 「空き家」・「空き地」と花の活用

事前質問として、空き家や空き地の増加により、まちの景観や雰囲気が増えているという悩みも寄せられました。

池邊氏からは、登録制度や見守りの仕組みを通じて、市民や学校、地域団体が関わる可能性が示されました。空き地を花や緑で手入れすることは、景観の改善だけでなく、防犯や地域の安心感の向上にもつながること、また、行政が制度面で後押しすることの重要性が指摘されました。

《質疑応答から見えてきた共通点》

質疑応答を通じて浮かび上がったのは、

- 「完璧な形を目指すよりも、できるところから始めること」
- 「一人で抱え込まず、関われる人が関われる形をつくること」

の大切さでした。

花のあるまちづくりは、特別な人だけが担うものではなく、それぞれの立場や時間に応じた関りが積み重なることで、地域に根付いていくことがパネラーの共通認識として確認されました。

「花のあるまちづくり活動事業」がスタートします

今回のシンポジウムでは、花や緑は人と人をつなぎ、地域コミュニティの形成やまちの魅力向上につながることで、また、その活動を継続するためには、市民・行政・企業・中間支援組織が役割を分担しながら支え合う仕組みが重要であることが共有されました。

まちづくり情報センターでは、こうした議論を踏まえ、令和8年度から市町村と連携しながら「花のあるまちづくり活動事業」を始めます。

公園や公共施設等を活用したコミュニティガーデン活動を通じて、花と緑のある空間づくりだけでなく、人と人とのつながりや地域コミュニティの形成につなげることを目指します。

本事業は、市町村から活動場所を提供していただき、まちづくり情報センターが講習や実践プログラムの企画・運営を担いながら、活動の担い手育成や地域の運営体制づくりを支援します。

概ね2年間の支援期間を通じて、将来的には地域住民が主体となって活動を継続できる仕組みづくりを構築します。

また、本事業で得られた成果については、情報発信などにより横展開を図り、県内に広く「花のあるまちづくり活動」を普及していきます。

「花のあるまちづくり活動事業」

公園や空き公共施設等を活用し、ガーデンづくりを通じて、
地域住民の主体的な参画を促し、地域に根付いた継続的な活動体制の
構築を市町村との連携により図ります。

目 的

- ・花と緑を生かしたまちづくりの推進
- ・地域住民の主体的な参加の促進
- ・持続的なまちづくりの推進

特 徴

- ・人と人をつなぎ、気候変動・生物多様性保全に対応したコミュニティガーデン
- ・地域の特性に応じた活動

役割分担

連携

市町村

- ・公園や空き公共施設等の活動の場の提供
- ・チラシ配布やホームページ等による活動周知への協力 等

まちづくり情報センター

- ・事業全体の企画・運営、活動支援、人材育成
- ・活動立ち上げ、講習会・体験型プログラム等の実施

連携

※「花のあるまちづくり活動事業」の詳細については、まちづくり情報センター HP、又はまちづくり情報センターまでお問い合わせください。